波よせつる時ハ海をもてこけつゝ
春やゝともゝへつゝやうつあるとてこゝもとん
花ちるさとをめぐるうらハいそくみのまて
ゆふかつにもや侘人のうらんたつることを
こゝろさせるれいせのこやれ初
音ハ山ちまた友のとハぬ妻こそうけふるみ
ちゝちくきゝまりこさをといへることそ
おりきをこの宮ちゝおかりるうん
ことハ花をそふんハ妙うんやとこさもとん
末よすみふハせをいそそてるかと侘住

三番

友

宰相中将家

春ハこゝ花咲よもの山てふんをこゝにほひ
左勝

辨

冬こもりまふんおくちもゆく雪の
たゝの乃さまよりくく侘うを花よりほかの
山ふんをちゝ淡てもちれ世ふ人みるしく
ふ地するた奇ハ未白いかまそやとてぬとろ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

あるじ侍すまとて雲ふかくとぢこめたる山ざとの
すさまじきまでいまもうらみくらすや

四番

左持

雲風のうこかぬ空とみえそめて花ちる山の朝あけの
太

権律師雅頼

左大将雅頼

花の色もうつりにけりいたつらにふるなかめせしまに
左

みえ侘ぬうこかぬ空とちる花も
きそふさくらも雲とこそなれ

太政大臣

左京大夫顕輔

五番

左持

残りなき花のさかりをみてとせん心つくしのこと
ふつなのことく侘ぬまは持とみてとらん

中宮亮重家

左兵衛督清輔

雲庫頭頼政

あふみちやまの深きに詞とめて
左

はたたの神已如着陵雲蓋在磐海樓いつ
もはてとよみてとりてたのい
後撰集よも入まてとらむやはこの道

六番

左持

若狭守経盛

太

櫻花うれしとも見ずもろともにたゞ春風のとふぞ悲しき

太

ありふればつねなきみゆゑうき事のかさなるにつけてもまづ思ひ出らるゝ事ありてよめる

ことゝはむ人しなければ山櫻ひとりぞ見つゝ春をくらしつ

太

ことをとふ人もあらしの山櫻ちりなんのちぞ形見ならまし

太

ちりぬとも香をだにのこせ梅の花主わすれずと見る人のため

太

みそそぎ

七首

左持

ちはやぶる神のいがきに懸ぬとも思ひ出でよ賀茂の社を

前豊後守頼清

太

春の日のうらゝかなるに

左持

たづねつる花の梢はおほつかなたゞ春風のとふにぞありける

太

たづねつる花のありかをしるべにて雲井よりこそ春は来にけれ

左

いづくにかおりくるとてか梅の花匂ひを添へてとゝ迄は来ぬ

太

山ふかみ梢うつろふ春の雨やあらんとぞおもふ

ゆふたちのいぬるやまかぜ
花のかやあらそふころと
ゆくをおしみてまつ
こいへるかとまつこすら
こともゆくをおもふころ

八番

左

春をへてをしむよこまる花ゆゑに
ちらぬいくへの今日こそはの

右勝

侍従有房

ゆふかぜの今日をさそふ花ゆゑに
ちらぬいくへの春をこそ思へ

左持

前中納言雅季

九重に
ちひろまでとて
いろもかをしくもみゆる

右

太政大臣

春風やくもゐまでをうつすらん
たかねの花のあけぼのの空

右馬権頭隆信

春をへてそこひもしらぬ池水に
たえぬ光をみるこころかな

ふをほそくほりてその匂ひそんことを花の芽ふ計
乃ちりのやあらんさとひまうあふ花あふ
たゝ俤なのまゝひあつもちゐてそ今ふはし
もおそくやおかゆるさまとおりてくてんもろ
き匂ひそくへんいまさうへうを色を愛て白
ふとそへ事こゝろへてあまおれもとやや
こみもとふなる残花拘かとみを

十番
左持

まつ雲ふゆふ今こまとてみそ陸奥の橋あり共う

柔明朝臣

左

をちこちに匂ふ桜や雲ことに
はたゝのさゝ雲ふの心おかる志ろう雲
たゝゆへさゝれぬ雲いつまてきまゝみゆるまうて
いつまこと雲のゆへうへんことふ心おとまを
うけをきをとあとやよ紙くきこゆるん
さまとゆへさゝとこゝろふきてハ
さみおくきこゆるまこれり社なそあさ
とこゝ俤めるたゝ姿あと今すこゆう
ふゆみゆをちくゆれることみへ

公地そすまてたしうるこゝろさまのとゝまりおし
ゝまいまさ持うへしも

十一番

た　中宮大進頼保

いそきてや花ちるまてをすきのほらすてあふ事を社さく
右持　寂念

世をすつる公るゝ桜花あくやそのの日をそさます
たの花もたちぬさきにすきんとこまを
花をおりゆへのそ花のあまい
そるゝあるゆもちそうときゝの書をゝ花あまい

ゝろねいろこそつ称のことれうを弱をすかし
鞍をあけてすきんことあまりふるまる
あんたのおるくゝ花乃とにとまりぬ
ゝまて恩を辱うへ入公あゝ次とゝ今
さるものゝこそてるゝふるゝなゝ花
おといへるすこもひまりてきこ西迄ゝ
為持

十二番　西遊

た持
さゝ波やゝれ公の雪つきみをやゝ花おそこを

左

風姻けいふ狩衣の模花もち波うくまとちて赤の礼
たこと紫つくさいひしまそやすうまさこあ
右みみまみ山まら波うくまかといくてくまい
みゆうとまらかうくるかとそいうふそやさこゆ
まてと三のうさま持ちみそうり

十三番

左持

あうれくまもしあうしおれうひまや菊まそ是
右行墨祢宣加茂改年

多ふうて花をちうさあ世ふうせいおまめくやあやうみう
たうのすこ朝そうくきこゆうを月
ふくてうきこ歌の花をもうとそおかゆる
右いんありてみゆるを川ふことこと紫
くうめ有あるんやすんたなる私歌のゆこと
なめれくきこゆまてこ守すこあうて右いうふ
そやいひふやせうまこあ有あまてこ花を思くふ
ふうう又持とやすまう

十四裏

左

阿宮梨心覚

よしれ心花のさそふとみまてこそ
左勝　　僧後恵
みよし花咲ぬるそこそ
左乃ふ者のそれそのみるそそ
おりえぬるや心合れ欵とみえそうまをれ旨の
たの字そ、ふへしやとそこゆる
左の字すこと詞てをりとおりてくみゆる但みの
乃花咲ぬるとへるろそ心あまりく
ゆときこゆそうみまものの白乃けしめふ
みよりの者こをとけるやいそまてそうの

こうい毛をふく疵をるへし雅家よいけし
八重のしら雲といへるすることおうく
みゆ仍以左勝負
一番　郭公
左勝　　権中納言実國
おてなくるあるる郭公親こそそそそ者とおる
ふ　　小侍従
たれ称つるんれおやみえぬるん金のをそる花ときぬ
左ふのそそをまてるくん花とすまて未れ旨と
おうくたの寺もへまいをるるこうるまそそ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

いとおもしろきを時ゆるしをこせたまへりけるに
すてとくくへりそろまつ
こそそろひ若とまろ
おうしたてる猪

二番
左猪　別当藤原隆季
いつかまことのみ名をそろふ時ゆるしけれ
たれ
事とてきそろひてもゆるしくらひてさぶ
はれたれ乃奇たいむ
の朝よりてそろふ

たいちときすることもろこ
いたる勝

三番
左勝　宰相中将家
久たく秋いろことおもの
右　雑幸
時ゆるしくまれありよすろ
左の寸ろ相いておうし
ろ云語のまといへろす
せさてろろやといへろ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

心地そすまさこあるへきことともおほゆる
たのもしさの山本うらをいかにおもふらん
たまへらまてたをたのみとやへし

四番

左持

時雨ふりそめしより夏乃衣
かわきもあへぬ袖をなくらん

右

まちわひてきとゝきすなとし初音
たれつらきさとふみゆきをまつ
いつるかたにうらみんそ恭女野客おもひ

右大辨雅頼

右京大夫

あらん時はおもひもおほしくやいかんさうらはん
雅こゝろもやたえまさりもすへきもしをれたる
あんといへるおもしろくきこゆるをこの袖のう
そそきあまたてもおほつかたなく候哉
あらん時はおもひなんとこそ申候へ
是又の判者持て申

又番

左勝

重家

さみたれにまかせてつゆのおきそふて袖のうら
ゝ

頼政

時ありてもいとそこそこに紅梅あるを
をいかにもとつくろひたてたるこそおくゆかしけれ
あるとき春いかうふぬまなどなるもとそおかし
ゆきとそのこをかむる時ありまたうすきを
ふるさとに又こかうをとりあはせたるこそ
さもあらんと右手はんあまてみもろと高陽院
乃宮合やさてもおそてもおそてもおそてもおそて
るく一夢れおりぬんとする手ひおれて
きてあまてるをいたの後まやをを

六番

左持

鍾盛

郭公なくなくいかにうき寝をすらん
右

師光

忍ふのみだれもあるかときけばたれ
歟左の時なる左のうねこそといへるすこ
右のそ袖のみぬるさそあるんいつまでも
るまてさこあまてはおるこそ

七番

さ

公重

んあらいかにちかいてはなるこいかなる事

右勝

時雨ふりそそぐ秋の夕ぐれ
たゝずみきませ山のもとかげ

左

ふるさとのもちひてとかす
ふるさとぬれやすらんたもとかな

勝とみえそめ紫

八番

左勝　新楠

時雨ふりそそぐおもひもあまの
とまやとかすもしほのけぶり

右

いへるまでもなくきこゆるをたゞ
とかくいへるこゝろたゞならぬを
右勝とみそめ紫

左勝　通能

子規なくなる夢のさめぎはを
右

ゆふてふなるさむしろを時雨ある夜と
たゞすれどなほとふらひおもく
みもおとれきこえぬつゆをいへる歌の
うつりてきこゆれとさやはあらん右勝
なきあるを夏といへるこゝろもとゝ
ここのまたの勝あるへし

九番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

友勝

時鳥こそまち初さ夢うつゝ

右

季経

時鳥雲路よりにや一声の

たゞすぐる迄聞ゆるはなし

隆信

ほとゝぎすいかなるかたのしるべにて

るきこゝにいたるとまてゝるらん

雲ふかきやまもあらん時鳥

聞つるよりやこゝろまよはん

時鳥なくやさつきのあやめ草

たえぬるのちもかをとゞめつゝ

いつれとはいふそやれてあやめ草

十番

左勝

資隆

ほとゝぎすなきて山時過ぬるをやおそき

まうとやきん

右

郭公まちて初音を聞ときは

たゞうちとけてとこそいふらし花橘の名たゝ

おもふこゝろのくまもなきかな光橘の

ふかすみそらねしてふ乃一声きくに

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

しをけてもうるみしとへる女の子とおうして
優よいさこゑもこまやかにきてきてるんぬもすれい
狂花梅をもてるとやへさや

十一番

左持　頼保

こまにいまのひれをの時雨るるをうらこみて我まるてん

右　寂念

なこぬめぬるまも時雨あめぬんにのうくさうるを妻の
やさこまこいとをきてよのくふあうてんかと
いへるを深きひおりくる右大将生この

ぬるこ我の時雨といへる謎語の答まこそみる
こまを松ようおひりかをさてもあるん

十二番

左持　為遊

多規志おこの春ひれをのひれふるたひ袖うらくく
右　生西

こまをんこまをてよ時雨るたひ袖うらくく
左方伝を表乃志のひれふるとうためさて
さこゆふさこもり我そとるのまてるほらや

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

十三番　　成仲

左持

右

十四番

十七ノ持　心覚

お親もたまつりまでもかくてたまつりまですてたん
お　後悪

いまこそいてちうれまでは
危ふ我ことといへるかと廃せるまを
ふるまでもいへるかとやうみ程たいすること
くみもるをふるまでいてちうやいう
又いてちうふるまでをやのちるを
やとへまつりまでいてちやすたんたまでせるは
たいすることはおりく仍る持

一番　月　檀中納言
左持　小侍従
かすめる夏の月をおもしろみ
二ノ太
心すむおりふる雨の秋もなをめうそ夏き
危ふそろあるまでおりくいろひ
あまたのかとんをほそそくまれすんん
ふるまでみんるのあいるくやあるん
太ふんすむおりふるあをやといへろいすふも
んをおりくきこゆるを秋しもあるまでよまれ

ろすとてことのちふみさうらん四番の初題
節運轉秋の水陰之位や月文陰史精也かく
遠く月れ影もおうりをそへ人のこもあてまて我
まんへきおりすて彼ちやうまて秋しもそうの私
まもすことをこともうるうことそおうりほりことまて
いつまてもおれさまおうく仍て持

二番　別當
左持
あうるふれんつうこにおうとてそ世てふ秋の月をみてか
な

三番

天のうらうらぬ月をおうむまて公もはうてもれおそろう
左方秋の月をちさうんをんくすんろ
右かすことおうくみゆうをんもうることいて
んうあようらぬ月ををうまてうとも
うらぬおうこをおうまて公もあう
ろやおうんさまてこおれまるうこうう
みやまて公も持とて

三番
左持　宰相中將
おうむまて公も昇とうふすみのうんや月のみおそんん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

右　　　　左大辨

海月のあもおすくへくせん月をみすてゝ入なせまよ
たゝんすることおりくこゆるを月新るみを
そへうるのをきこ宇合もみえ給へしふや
めるまてうん地をすると大ゐ人をまんを
おりくて月をみることゝすくやあらん
又持るをふこ発

四番

左持　　　左大辨

皇国れさこみ宮そ社の月すめ庭ふみそれおとそくく

右　　　左大辨

名まてき妹在山月影も秋ふてそ不そてう面うける
左宇根漢雲皇社月流て沙庭霜凝冬水
凛く見甚文辨已以詩篇心通ふ玉も可
既て右守妹在山乃月も秋るとい今形
詠月守已面西理てふめつきてころる
名まて宇合の袖とみそてう仍面持早

五番

左持　　　重家

いそ日多玉川の世小あつくて月みる秋の数とう称ん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

右

月ぞうつりまぬやこゝろ

頼政

たゞ不儘文花偏金義実をよさろうと

さこゝろたうつまし

すこゝひまてん

里人やすう荒涼なん載のほとゝ

めまそのまもさゝめて里いあらめとを

こめそう〳〵のさゝ

おまいおやうれとまも

涼して月をゝろ

こゝもあまとすこおうまいこまも持ち

六番

左勝

我ふあまにう清ろ

右

経盛

秋よ月おまやのうぬん

たたおれかこにみ

ふてる月をこてと

みも右にこまもおうくさこも

と月のあまやのうぬんこるいあまのうち

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

かくやいはすてゝいとゝ
しくそれつゝ秋のあはれ
こゝろもしらぬのうちとやは

七番

左

くりこてこひねくく月影の
右持

終夜さえてる月の影をみ
左勝

左のうみをみやしらなみ
右

きこゆらん左おいとゝ

公重

月影の更ゆくまゝをみやし
紅葉

ま庭もおもふよりも
侍従

優なもあるに
通紋

かくまてもいひたてさこゝろ
八番

左持

秋てにこゝろひかれ影を
右

月よりとのそれとこゝ
左

たこゝろひの月を
勝

首句ふ影をみて
右

おもひといへる影と
左

ニてこそまてるやらん左ふ
勝

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

をのこどもこれかれあつまりて
ものなどいひあはせんとて
ふみつかはしたりしかば
九条
基詮
うれしさもおもひやるべし月のあき
太
隆信
雲ふきはらふ風もまちえてさやけき
たのむぞよ月のあるうち掛よかし
後水尾院御製
ふたつなき光をそへて雲もなし

和歌月次といへるふみやありけん
さだめてといへる事もましてあかぬ
をもしるべきやうなん此すぢ
ふるやうなれどいまだ新のさやけさこそ
たのもしうおぼゆれ
千載
左持
資隆
すみのぼる月やさ夜ふく浪間より
右
雁聞ぬ
秋風にたちをくれてやすみぬらん

左乃守能ゝ
右守ん
かと
安よ
このころの守れ
そま
御ゐ
すて
めろ
ようて

十一番

左持　頼保

こゝろにてそ雲ゐをはるそのけふ今まて

右　家会

秋のよをそそてまろうろきにしめる月新
左の雲のはてそそてろうろきにしめる月新
しめんとさこの右のうろきこの月を
よろともるんいへろろ一そおりそてそんを
すみぬへく侍るをこそ此
あよまろうろきへしろんも

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

まてとうきさ山の葛もてこん櫂
未のまてこの月よやとい
あらん但今のすることそ
又右いうも月あるとこんこみもまいまて
もそ持ち
十二番
右勝　西遊
もしくふ山端の月みまいう
云　生
池あれ底よおもしろけ

その月れ山のていつうふすきうこん
おさをといへうあすうさへうてやあうん
うすもまもあをこんまいものをなん
ことい二山う同名底あそみうこん池やすん
右い池あの底小りみちの散をけかといへる
まうこいうあふもうしく来栄い池よも池
まもうふもれうふもれうやこれらや
すん又月もあうそうかともそうま
うこのうさ今よいうれくよめまてをかを
うゆうれ朝いうく開をいあふ

月をみんよ入ことの
おそきをいたうちとすへ
十三番
を
ちくさのあやなく波のよる
左勝
いにもかくこそ有明待る
左ちくさのこゝろのふかみ
月のみやまとへやかうつる
右ゆふつゆよりひるまて
みちもなきや右所にんありて
勝

成仲

改年

名行の月の江維をよるまて
さをさしいそまこそいたう
空をとこへるかな
ちやるまをさしいるともいたう
左めつらしけるまをさし右のりをみたり

十如義

左勝

心覚

さゝけさいそるまうつる秋の月あそをよるまて
右

後恵

うきこそりおりこそいつあはれ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左衛門督さねもろ朝臣の家にて
志りておうくさこそ但あけさいふ物なれ
こそまさまてころ物をとさやけてもやすん
このさやうとつゐ初古語よいへる神系の
りめうりおこまてろるものとそみそてろ雑神の
宮舞ものひしときまであるおりし詞
あるさやけかんさうくしまいふ物もこと
ひつくさやうふいさこそ
竹のとやまろうとそへるすましけなる
ふかうへしそまさり風れさりかとさや

そことひかろきてろ物ふ陽寒な
ろうまへりすまこまくふかそきこそ
ふかきこやあろん春の宮ふいろきこと
ころもみえんすることもおりて
くふみのまを左ふすてあかいろるさ家ふ
ひろるろ月やるとまふいまあそろるん
とみのろへよ来の白るとろくみえ行
まふ左ゝ門

一番　雪
左

権中納言

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

そなたやあせやるまうつてあるといふもみえず等来

右勝　小侍従

庭の面にみうえしむ雪ぬをそけさこそ人のふみそめつらめ

左　ふみそめしかたもやぬれむ雪ぬをいとふこころの

つれなさもまさるまうきあめのうちに

うき袖と降つむ雪ぬをそそぐとやいふ

すてふまうくみもあらん右の勝とまうすべし

二番

左持　別當

降すおうるまうぬれやのむねもえぬ雪ぬをいかにといふまうぬれやのむねもえぬ雪ぬをいかにといふ

右

雪ぬをいかにもまうすべきやうなし

左　ふるのこやねもうづもれてありふる袖のうへ

もうづもれてもさこそえさえん右まうすにおよばず

かといへるまことをふかくおぼしめしわけ

持なるべや

三番

左持　三河

久かたの月のかつらもちをぬをみもすそ

右

雪ぬをいかにもまうすべきやうなし

宰相中將

幹岸

道も私く當路つかる者ハ
左京亮なるべし
ゐひおもてハ
この紫のいひおも
右京さまハいとさ
いふとそみるといへ
こまゐ伸の老
ふるものもそまゐ詠
をとゝしゐて軍
賀伸老ふるを

えうたゝしふるさま
所々よひ林とりとも
ゐりふへくもるきま
もゝ所々もをことも
ゐふる手ゐりよつて
詠もゐ所ゐこのる
同料ゐりこれも

田番
左勝
ゐふせんをまもいまこそ
ゐふ

左大辨

右

右京大夫

いろいろの花ちりまがふ春の夕

左右ともにさそふ風かな

重家

雪ふるとこへるかとのみ見ゆるまで

さらぬ松原

左番

左持

頼政

志賀の浦波のどかなる時も花さそふ

右

重家

雪ふりまがふ春の夕風吹かねど

左京大夫顕輔

左勝おほくの歌人侍るめり但ときよりの雪と

もみてのちやまとなでしこみやもとも、そんする白妙

雪ふまでうゑんをきこゑみんもさぞふかうまさ

りたちせぬ老松乃山吹風のまとゐへる、み

くさきこのもとの山風吹ぬさきにおれる花さうぬ

うゑおきこのもとの山風吹ぬさきにおれる花さうぬ

右方の山風吹ぬさきにおれる花さうぬ

いへるなどいひおほせてこゆるを松原松の緑

こひへるすてつゝそへたるふぜんまでとゝろ

みるさまもあるべし左もいさゝかおかしうか

ゝれあまたこゑまよ、おもしろく侍るとて中

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

六番

左持　源盛

住吉社頭云々

右　師光

左

きてもうき秋はの雨にうつろひて
ちるもみぢ葉もなほ袖ぞぬる

右

いろもかもおなじ時雨にそめながら
雨のふりかはるをもみぢとぞ見る

左

雨ふりて秋はの雨にうつろひて
ちるもみぢ葉もなほ袖ぞぬる

右

いろもかもおなじ時雨にそめながら
雨のふりかはるをもみぢとぞ見る

左雖有数首歌風不可勝右

七番

左持　公重

雨ふれば秋はの雨にうつろひて
ちるもみぢ葉もなほ袖ぞぬる

右　頼清

雨ふりて秋はの雨にうつろひて
ちるもみぢ葉もなほ袖ぞぬる

左雨降つゝちるもみぢ葉おほくもみえこれ
ぬ乃瀬田の名片敷の衣又玉のをも有こひぬ
かんこいふらふすゝりの雨ふりて
ふらやまん庭をそうねれるをとて

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

かりにおいまさきくとをらくるもあをつ
こまをかこのおもうこころん但書おれ
おもかよみのりてまた書とやへし

八麦

左猪

高砂の尾上も雪にうつもれて花ぬきとこそ
右
秋ぬる歌もいへさえ月にあかす
有房

左勝

左勝すること初おうくきこるたし秋ふる
ともおもうらもれをいまうれしとそ

通紙

こそいやらめうらまつのせていまれ花さうかと
ふてそいおかのこのそいまおうくきこた
いおもうことおかくるく右
方偏数万紫之奇風頭霄中右妙称也
うおうことそんそいまおうくきこた
かいうるさ有ふそえぬんかと
いへるまるみちうれ初よおうてきこる

九麦

左持

季経

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

異行をそこともみえぬ岩つゝじ

右

隆信

澄そめて色のとみせてその指

右

左衛門尉資隆

左右なく行ゐよるの氷かな

せきもるゝ水をば異行かとてこそ

やいとかな行かたさいはゝその指

おとゝゐろおりしきまよる水鳥乃

くちばかそさいへるもいとゝよひあせ

らをねかなれかと持そやへるゝん

左衛門尉資隆

ちとせをて玉ともちぬ松ゝえひあ乱毛綾をそうしける

右

散昭

姫まつ事そ色ふかき尾上の雪

左京のかなそのりみちの

頭をあくれるもとゝ

おりくも伊勢みの白そいふやそこの雲

をとりみせ秋をまつへきかなてこそ

てそさゝめちこせ雪をそいそんいふ

玉ゝゝめ乱ゝ称もかねをそいくてとる也

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

巻百二十六

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

生西

十三番

生勝　成仲

改年

雲井まで落雷れまとふ名の
左右もしてるくてるまみもろにそうて左れまで乃
ことくあまん雲まそ
右のもれもろもはそよるこれこゆる
を落雷れまとうりやこへるおれを
るまやもみまとへ左うことやへ

十四番
左　心覚
春雷はの花の松山雲そてをれもけこそことへ
右勝　後恵

雷まとうれ物もそもおれもろ
左ふまとへとうはまみまれまふ
八雷ふまの雷ことへるとつる
ことまろまや右
つまの狂そやまくまへるろれ
これりかれるこへろまおしけまふ物

一番　左
左勝　権中納言
ふやろいせおれ雲やまとろんとみろあとおもろ
小侍従

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

[illegible]

二番
女房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かくかうつまこそ人の皆あるをむすこさうん
左大のこんいう紀ぬかてをつけるをとこそおう
くみえ侍まじきのさうもさらくるかと
さうもれんつまぬんまさうん
ひかしかたこいうかとおうくさこのをまの
こさうやいうかさうちさうふうとおやうん
もうもた左の後とて

左衛門

左大

いとうぬ恋ふそもおうさうれかたをあり

左大弁

右衛門

左大弁宰相

恋さふそれをこもおもをみをふるうん
左宮さうもきさまこふかたをみえ侍るをうれぬ文をそ
さうさうこやと右宮のおうふさこおそうの
白を今すこおりへくるをみそこまをこを
おうとうおうまじき右の後よこそ

左衛門

左

童女

おうもおそうんれいうまじきひうれいちるあるうん

右衛門

頼政

六番

左

たゝ袖おほふ恋衣
なみだもらぬもうせもの
ありけるとふにつるん
雖そなといふるすまの
ほる恋衣をや優ある
さまにて万葉集
ようみるものやうろ
ものゝてそ有ける
ものゝときよつてそ右勝とや〳〵

左

あふてたの世をねがふとも
右勝

恋ゆゑ人のこひやるん
左方あふてたの世をねがひてまもれる
彼る恋のんもあるとき
すてゝ袖をおほふてそ
彼世をとるをまつこひやるん
きあんせもみえ彼世ふ右勝

師光

七番

左猪

公重

右

頼清

八番

左猪

通紙

右

有房

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

九番

左　季経

いつもまことの恋とこそ思ひそめしか

右　隆信

我思ふ袖とそこに通をこそあはれ

左　ものいはぬ

へさらんおもかれさこそうらやまるれ

よろしくあるやうに仍勝

十番

左　資隆

おなじ心を思ふ

右　勝

そうもなきを思ひまし深よくつる独ねの

左　ものいはぬ

いつのまにおもひそめけんそれさへも

さてこそ人の知もうれしかりけれ

てよかせてよかるべきことあるや

こそおもひくさこそあるらめ

つることのんいひおかせぬやうふそこをもとふ

まことのことやつはるる袖つまことおもひく

紀こもまろ八たの擣とゝ
へ

十一番
左持　頼保

悪のふたつむよりきそへふる我身も石とやあるらん

右　寂念

岩よりもかたくとこもひるさこ恋をそへよやそ
左悪このふたりも我身もこゝろくらへやそ紀
我ゐるへし但し石よりおもき事
こゆへこそあらんそのうへおもくこ侍し
八武昌北山上有碑文石其状如舎屯一夫婦

あるとそりその男妻こ玉へもりそりのまこと称
みそのれ山のうへにてそのまこをとりよりそ
う化してそのそこをとりよりさこ悪かん
よおつむよおもひおへしともおそえねこそ
石よりもこゝろふかきよ侍りたまりよんん
ふこともをへるすることのふしくおも
ものと赤のまやこともおくく侍らん左乃河ふ
右ふりもしん右岩ふおふる松堅柔雅異縁芳

十二番

十二
我恋のけおくるおもふ袖もあふてぬるきことをそする
衣物　西遊

生西

色ぬまし神末そてそ衣てぬるへきよるひるそ森
友の行のまゐ小寝あふことぬるきこゐてふ海る
ふきたくそてお〻く侍るたらの花
ふしまりおるかけさこれやめるそきあ通
よも侍るちくゆうれるまさてふしん北
すまをゑのおくえるやゐるへすることと
おう〻くみえ侍まいた物の庭へ〻

十二裏
庭　成仲

ふしねおくさもやそ行つあい田中舞ふ神そ通ぬる
右物　改年

雲のうへ春やあるらんこゐ武まそあへきをも新
庭乃行ねさまおうくこひるをとそえ
みゆるをたおれるとふかさこゐむとろこと
こそさてあらしてゐ侍せまもちく田中舞と
よ社ぬまてあるゆあさ舞ふへる行きこえん
しん北するをこまいい行つえんなとゐる舞花

小いくさ
ゆうてうさこ乃ようあるやと
いてあんさまたおかりあさこるあま

十四番
左持
いさあの神事も恐すまし
在
さあなあさ乃あ乃ぬさこるん
左千春及日本紀

いさゝかのみてぐらを奉りてもて
いとてもを持ことを

太皇太后宮亮兼経盛朝臣家歌合
題
草花　庭　月
衍人
刑部卿藤原重家朝臣
太皇太后宮亮兼経盛朝臣
前少将藤原公重朝臣
右近少将源通親朝臣
前中務少輔藤原季経朝臣
太宮前大進敦頼清輔朝臣

仁安二年八月日

皇太后宮亮藤原朝臣頼通
蔵人左少弁藤原為親
左近権少将源朝臣有房
右京権大夫源朝臣師光
宮内権少輔藤原朝臣伊行
中務少輔菅原朝臣定長
白衣祢宜祝部成仲為祢
宜祢宜賀茂改革

左京大夫入道 教長
右馬権助入道 実清
陸奥守藤原朝臣定
大進公 後為
亮公 成昭
登蓮
三河大殿女房
小侍従大宮女房
判者
太皇太后宮菅大進菅原清

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

一番　菊花

左持　刑部少輔藤原重家朝臣

色こそ菊の花すゝきうつろふ秋の野にいつまでもれさく花ゆゑに

右　前少納言藤原資隆

左たゝ言みのつるふかきをのくまゝことろなる紅葉あらしそ吹乃乃たきのむもひゐもに

ふもりし物也いみのうれあるひかりそてあるなすもひて有まるひよ持よ定年

二番

左勝　大宮亮経盛朝臣

菊のきせたまもるかくまてふ千代をかさねん

右　前少将藤原公重朝臣

あさこそ君のかにひすれ

このそりひ又ふきさしてふ安部氏

ふりそこふことを栄あれ

左持ありけるかさせる徒なくい

右近少将源通能朝臣

三番

左　右

如月菊ふもる花やとこふ乃

左衛門尉

小侍従

左衛門尉

四郎

左

前中納言定家卿

左少辨藤原高親

左

左衛門尉

大納言

左

大納言

お茶庫別当源頼政卿

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

久延六勝之十番

六番

左持

ひとともに　そまもるさとを女郎花
　　右

娘部恋歌よんいまろ

左おりく俤うつす但うつろふ花をも
　　名にたてんやおもかげを
こそ、ひるうつろふまでもぬるふみた
あら森おりきふみ

太宰権帥藤原定家

右持

白露紅葉折敷部成仲

七番

左勝

紅の花ゆへ色に染ていく人もしらぬ
　　恋をする

中務少輔定長

右近将監有房

染てとく出るあきもの娘部恋歌
左よくよのまて俤うつす但うつろふ
いろよりもまさりたるやうにきこゆる勝

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　ガラス使用

ふそくやいつもの左衛小袖

八番

左持

亮公

うつゝ哉雲井を分て薫るらん紀ノ国の花

右

釈迦花ふんとそあふよりの

登蓮

左こゝろをよめる

まよひ〳〵花ちるさとをよそにみて

みやこの地ぬしさるをしさるゝみをいさゝ

みをことのまゝならぬもまことの河

きまとうむへきさに祐盛山海をうむ第まをう

ひと俗ついそもろさきれおやろのちさみや

ろやの姫ぎり統のろんろぬさや姫と

つきろおかつろろとを年文をう

へそそよむへき延日年記竟宴侍めも

うてものそろやむもれりやの姫こそそん

たろうみれやかろうふみ京あ里て

そよまれろんとあ

やろろ

九番

左 猪

女郎花いつも秋のみそなはし

右

心なき秋の野よりも花ゆゑに

左いと興ありてうつろふ

まんまるもいつも又心せよ

うちにさせるんもあるまじくさめや

十番

左勝

うらやましそうつる秋の野辺かな

右

花すすきほのぐ露のそなたより

左なびきもたよわきみまでて侍り

十一番

左勝

月迄そ秋を菊に待侘つる

右

秋の野もおなじ花のいろそとも

左もえをいろひろにこゆるそかしを

まておうぐ侍ふもをろかなり

行岡祢宜賀茂政平

左馬權介の通 実清

大進公

三河

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

右元永二年内大臣家歌合に兼昌哥
秋くるといふ許を花のさかりに
みてよめるこゝろたらず左勝まや

十二番

さ

我宿もさ荻ふく風のおとまでも
秋をしるかなと哥人丸延喜東宮御時
右古今集にありてこゝろおもしろき
きのそこもとにをくらをふの

一番 廉

左持

小男鹿も妻をや恋ふる山里の
庭の木の葉のふかく積れば

重家朝臣

経盛朝臣

嶺よりも廉ふかく積もりぬる
庭の木の葉をかきわけてとふ

きこゆなりみち遠き野の小男鹿も
そもく傍題よめるにや

あまてる天徳禁中歌合も侍るめれどこの

ことまたあらじとてわかれさせ給ひぬ

二条
后宮

吹風も昔にあらぬ秋なれど月はもる屋の袖の涙を

右

妻こふる鹿ぞ秋風吹くごとに萩の下葉を色まさりける

右大将通綱卿

右大将通綱卿

為親

三条
左衛門督

なほざりの秋の契りと思ふにも猶あはれなる夕暮の空

頼綱朝臣

亮公

芝草のかりねの庵の秋の夜をとふ人あれや松の戸ぼそ

右

なほざりの秋の契りと思ふにも猶あはれなる夕暮の空

四番

定長

小男鹿のさ夜ふけてなくなるかたの秋萩

右持

季鍾朝臣

小たかのをのへにあるやまかつの夕暮ごとに小男鹿のなく

右後朱雀院御製

けふこずはあすもこえなんさよ衣きてかへりにしかりねの袖

公宴

左勝

公宴朝臣

きりぎりすの鳴もをしき秋の野を露ふかくて小男鹿の妻

右

鹿よ鹿の吹こそこえもさこそあらめ

左鹿乃袮かあもをしきにはあらねともまてといふにもかくるもの

ましていふかひあるへくもあらぬ手こそあれ

え袮こそさもあらめ後朱雀院御製の手こそ

よやまをへたてゝ待るめをしてと鹿合をまた秋の

きこえいるおかのこと多めてゝ侍るなり

たゝあるやをのゝあちこちあるんと侍朝

ことおほくひかれたるこゝろひかをしてと

みつるよし令を修りてのちやうやまつ
あるを称と令合よしふみ申あうこうや
乃ち左衛門佐経俊奉

六番

左

資隆

業房朝臣とひとしくつかうまつりたり
右勝

小男鹿の巻をうたふ

登蓮

右いうこやさきつころや又何のやもも
みをしたるこいかなるみまりてやうあり右

業房朝臣とひとしくつかうまつりたり
こハ九十月をやすらんねてうひてや又題
をそへてよめるうんえひ社会合をとのたまへ
もしかしこき跡ハ女郎花を
そへてよめるやまにいひおくれを
こそのくまと雑したるやうにおりえ
侍るへきや

七番

左持

頼政朝臣

第四十六番 男蝶も妻こふる春をいそぐ哉 成仲

右

杜の雫花の枝ぬらす露やまつ春のふかきなるらん

左はおりふしやさくらのいろみ侍るに左可申事も侍らん文字もやあるらん侍らん

遍昭歌そへ和歌作式よせしもこれもやまひあるこゝちおぼえ侍るこの会

おもふこゝろのいこのこひおもふこと侍

也中あしへくもあるこゝちにやうかれ侍るらん

可申事にこそ侍らめいかゞ

さてあるべきことにや侍て為持

八番

左 陳光

風ふかぬ春の日ながの山ざくらなどか雲なる心

右勝 實清朝臣

あくまでもこゝろのどかに春の日の暮ぬる程を待つるかな

左首尾ともにめでたくこそ侍れ

春ふかみとけゆく雪のしたくさのいかでかおそき物思ふらん

物思ふ人の心のどかなるべきにやおそきこと侍れ

おくもあるべきにこそ侍らめ

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

九番
左持　　仲秋
秋萩を苅ゐむすびてや妻乃
ゝ
妻こもる秋の家ゐの小男鹿の
左あくるも待ちぬを仲秋
秋ぞとも苅ゐむすびて小男鹿の
妻をこそ待ちぬらふらめ
まもあらじくもでる月乃待
ちぬらふらめ

仲秋
十番
左持　　三河
終夜妻こもる岡の小男鹿や
右　　小侍従
云ふもおろか男鹿の啼妻こそ
左あくるまで待つ秋乃ゝ
右あくるまでふうちもふれこそ
さまでとふことふらねども持
仲秋

十一番

こと

小男鹿なき出てさこそ秋の山

六　勝

里ふるし雪ぬきすてよ竹の子も

左そくにあんまてさこそ秋の山

こよの雁乃なくねをきゝてや

宮にあんまをするとまやりそふ雁

つまこひてなくこゑ〳〵人まてるこそまされ

あらしや雪ぬきすてよ竹の子も

改革勝負

心覚

すてゝおけあらしや雪ぬきすてよ竹の子も

十二番

左持

嵐ふく三輪の山もあらしやみてぬきすてよ竹の子も

右

大進云

左東方文台

山里の秋のあはれはまさりけり

左おくにいる雁のねよりもかん雁のこゑ

やま里のいほりをたてゝ住まてもあらしや雪ぬきすてよ竹の子も

ものさひしくおもふ人まてこそあれ

おとろへてもこゑねたえすひまこそ

ことに高地

一番　月

左持

月さやかなりむさしのゝ人をも秋の夜とやおも
ふらん　　頼政

右

のゝ草ことに秋の高地より月消ぬかつをみやこの
たなばたつめもこよひ秋のそらめをいとふらん
ねのみなかれんこん地をたゝくこゑ
秋のあれまつ虫のこゑもよわる夜の月
かよねのみまそ月のおもてのみえぬかな

重家朝臣

めつらしさすさまじくてそそくそゝ俗ことにかつ
るをもても左乃秋のそらめこいつるにはさ
てもみえねいつまでもやとて

二番

左持

松浦なあれ松虫に夜の月ふくとをしん

右

登蓮

月影のさやけきまゝにをく霜やふるらん
太皇山の鐘のこゑまでも夜更行白雲も
中めるまで八秋月似夜寒詩もおもひ

宗清卿の家にて法文の歌よみ侍りけるに
述懐の心をよめる
前大僧正慈円
和してそそるまゝにふれるもみぢ葉の
あらしにたぐふ山のかけかな
三番
左持
おもひあまり身をも月にぞなしはてし
雲ゐの雁もこよひ聞らん
公重朝臣
参河
月をみてくもゐのこよひつくづくと
左おもひあまりみのもなしはてし
末は誰も雲の空とぞ
四番
左持
月さえてみしもなかばの夜ぶかさを
なをなをいとゞ秋風ぞふく
俊恵
月をみてわれもこよひの秋風に
おもふ事なき身をもしるらん

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

右

通能朝臣

[illegible]
たゝさへうちにあつて袖かうふるあま
やうなる月光を雲ふかへいるあさこ
そのまゝ袖ひぢのそまをあまをいうの雲を
まるやうまでたつあつて又物をいふ
ときそうひのきぬの月をよめるも好
可合しけまでこのみもあまをいふ
や物ゆうへうん

又裏

左

季経朝臣

さもけさこそ又こもる月をいるかし
右勝

實清入道

いそかと秋しも月のうんみるをあまをいふ
たすこたくこまでくまをいふ
勝と中負し

六裏

為親

さ

志かの月すこる天の橋立
右勝

政平朝臣

あるを見てよめる　　よみ人しらず

左風ふく川こそなくへ紅葉ばのながれてとまるみなとなからめ

雲ゐるをうつすと物をおもふこころはたえぬものにぞありける

うれあるをねにこの為勝まや

七番

左持　　小侍従

天津空あるもみぢの秋の月さすにしたがふ光ありそう

右　　師光

さうふるをよさこそ為雲もみぢ秋の夜乃月

左　樹病あるうへよいまそひて白
まもいかの字おおくこと侍るさ歌合も
中なるも右又歌
まさこうの病あるもも左のうへ
いつまも申うて

八番

左勝　　定長

月数まりと秋のよふそひ秀こそ侍
右
吹うふ月のあるれ雲こし風そうもてさ

九月なあたなの雲ふきとふこそみふ雨れ祖
よ下してさこゑ雨大かそも玄意多れやう
なあ左ゐ多れんよの物も、篠もそゐん

九番

左　　為房

新こそ月をよこ乱る浮雲に秋乃名をさへけてつる風

右勝　　成仲宿禰

そる月を沼のうへそみ時そあるん池平る
左秋の名をさへしうを物ないのよそやさこ
ゐ左ん曲僕鏡乃ん月はそみ

一片秋沢水よそあるん物そん町左勝
為重く

十番

左　　清浦朝臣

とそまもりなれもれ名も数くまあそ月みん
右勝

浪のそそ月乃新そ見に覚
左さそるゐなそ大
さら雲

十一番

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

左勝　　秋夜眺月

おもふ秋あるぬるみるてきまよ
　右
月影のてらすまてこそいとやすき
たいまもんなこるへ
みそそいてんもあるうへ
ぬく月やこよいるへ事荒涼有
のありやそうるこ詞をひきあやる
思ひ左勝とすへ
十二番

左持　　資隆

おもふ秋のこと照月のかけ
左大のこ秋の月ふ雲のうらあやうに
古今席に秋擬哥とかる月の
雲こてそ書そ侍也秋もはのそれ
くもまふふこ月あるみそへるそ
なもいへるもれを但とるこ
なる事おれかとこそ侍る

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

一裏　紅葉
左勝
山姫やそこもとうつるもみぢ葉を
右
うつすのさらぬ
左山姫いつ移ろひを立田川
に物うらん
おりるうへきこゆる
めりこひてすりもてそひぬも
もよをす
重家朝臣
後恵
又立田川をそめてもありなん
なと
ひとしかるへし
なたる
そのへきをさうなき
ふかんよりみたれ
も乃なしのきりそうをとめ
ふかおりうをまたれ
杜左勝
二番
左勝
杜雲井をまひみちのくの
右
経盛朝臣
頼政朝臣

[illegible]

[illegible]

[illegible]

大万葉集いくさそそたゝへ
をさそ侍也いそめるそ神心をあひ
くくさ事なるかゝて万葉

五番

さ　為親

あけ旨山哉かもとをさせかも
右勝　師光

しら雲のたゝなかのこゝろを
左さそこれくをとゝ楽つのひゝきもうち
今一たものかをいふ荒涼未ふかよの勢

こともめてたき事よそのさまう
こおりさ人〳〵申めをそもろ綾川のものゝ
そまをそやまの神あまを
を重にやこゝそあかを
まのうるへきこゝをいかに奇もあるへき
いつも侍るそたゝくをいかにかちまを
やみそ侍る

六番

左勝

山姫かみちなきをそうたちるやうそ岩の新春

公重朝臣

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1　　ガラス使用

六

政事要略

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
右　小侍従
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一たひ風の散ふりみち染とそ
右　　實清入道
色ふかく染うつしてぬとそ
たおりくみえ侍の大井道遥まてと
くまてうへたもみち
うつろはぬことをあらそひたのもんあるかも
きりへておりくをおりて侍らん
十一番
左　　清賢
おりくをつまとうれしみるまてもみちの

右持　　三河
大井川袖のみち染ちる葉の波よたちすると侍をみる
たいうるてものあるこそをそくふすると
いとひさあるのも風ちに雁をみし秋の夕
勝て
十二番
左持　　心覚
秋風ふきまてそむる紅葉の色ふかくそみすらん
右　　教長入道
みち染ん人目も秋のさそひてや

左こもみきをひてそ風のもなこの琴
まりきたるめてとゆきてとゆふ
たけこそもみえねは指をよてもゆうん

一書 戀

左勝　　重頼

今よりや着ものうにゆうて解うて
た　　師光

忘もうれ身なつまつまを思ふ
たなのひいまてる事もなくあるとそ
待上や白よそみしてゆうすふ

後拾遺ふらひおそうまこふたへせぬ命のせ
ゆるやおもねまたまとも初まうひ
まいのれるーともおえ侍の京
ふるを左勝をんくさそんまへて

二番

左　　公重朝臣

あもきれこひまうる家方式の
左勝　　為村朝臣
こひうあかて花をまてあうし水雪石

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

右ひようそうする又ふつよ紀よみていふるくも
あるいは云合乃訴とそもおりえねとふこひ
今てくありひやうまて御迷い物と申へし

二番
左　　有房
こひ歌人負、知まてていもうすむ和ふるまるそた
右勝　　季綱朝臣
是にまてこひを思ふ人もうかた迷てもつるきんとみん
左こゝろあるにまてすることうしかもし
たゝ見ぬさきのひことあやまりにおそ

申まて歌ふかきものて侍らん

四番
さ　　定長
後の世も忘ぬ契ありたのもしくこゝろ深き
右勝　　通綱朝臣
あはれみをかけんといふ歌ふるきにたゝ
左あはれみをかけんといふ詞のあるこゝろ
こゝろもしらくいふあるにこのあるまゝ今のうた
まことにもおかしうあり
こ会とそそとも此るまの

さくらかあまのうらなみ
みるめこそ人わすれ草
なれ

六番
左勝
あかつきのそらもそらなる秋風に
右
家をおもひてたのむかりがね
左負つつそなかるなる
六番
左
賀陽豊年
後鑑
清浦奇日

恋ふるそん煙をたにもみよ恋ひわびん
右勝
奇久
左さてもあるまんつれなさよりもまさる
や侍らんたゆたひやうある中に恋のん
さうもせよみもうらしく侍るまんし
七番
左勝
恋ふれど恋侘ぶる人もあるまし
右
頼政朝臣

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

八番

左

心覚

右持

参議雅通

九番

左

實清入道

我独と波こゝ城のさま迄そうらあるも

右勝

伊勢

中〳〵なのこゝろもとゝもすれ共

左こひのこゝろのふかゝるをや

かとおかしくあり侍り又こゝの句もこゝ

たゝなのやうにこゝろくこゝへ

神もうけ給ふとおもふをそ

こゝろにそいふのこゝろもまさるふも

今すこしあてこうみえ

十囲

左

小侍従

たの絵ともをとれる童女こ

左勝

紫雑

こひこうみんかるれもあこ武あれ

こまこ左勝よこそいとを

まこうそるかの侍ろ

たまうるもなう

十一囲

左勝　成仲宿禰

あせそ水波のはあまこいとろとみまて

左

改革

うこいとをこそうこいとをみて

左ろそもこいとをみえ侍ろ

おうえねいこそあんこいとをみ

やまてこそうえあんこと

けもおうえ紙左勝とすへし

十二囲

左

参河

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1